

博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	王 冲(オウ チュウ)
在住国名	中国
所属・役職	大連理工大学 外国語学院・教授
招聘回(招聘研究期間)	第14回 (2019年9月1日～2020年8月31日)
受入機関	お茶の水女子大学
招聘研究テーマ	第二言語習得における語意カテゴリーの再構築に関する研究 一産出知識と理解知識の観点から
研究目的	着用動詞を例として、産出と理解の両側面から、習熟度が異なる中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者のカテゴリー化の特徴を比較し、語彙カテゴリーの再構築の状況を明らかにする。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>1) 実験の準備及びパイロット実験</p> <p>日本語母語話者と中国語母語話者それぞれ4名に対する着用動詞及びその典型的な動作についての調査結果に基づき、44件のビデオクリップを作成した。その後、日本語母語話者と中国語母語話者それぞれ8名と7名に聞き取り調査し、実験題材を改善し、ビデオクリップを30に絞った。</p> <p>2) 産出実験</p> <p>実験対象として中国語母語話者、日本語母語話者、日本語学習者の3グループを用意した。日本語学習者グループについては、さらにSPOT90によって上位群(上級)と下位群(中級)に分けた。これらの実験対象者に実験用ビデオをランダムに見させ、ビデオの内容を説明してもらい、録音をし、後で文字化した。</p> <p>3) 理解実験</p> <p>実験対象として日本語母語話者と日本語学習者の2グループを用意した。人物は産出実験と同じである。産出実験を行った後の3-5日間以内に理解実験を行った。実験内容は、30個のビデオと10個の着用動詞で作られている文を組み合わせた300ペアを用意し、流れているビデオの内容と下に表示されているがどれくらい一致しているかを1-7の受容度で判断してもらった。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>本研究では、産出実験と理解実験を行い、日本語学習者の「着用動詞」のカテゴリー化の特徴を、中国語母語話者、日本語母語話者と比較することで、明らかにした。</p> <p>1) カテゴリーの数: 上級と中級学習者の間には差が見られなかった。学習者は全て中国語母語話者より細かくカテゴリーを細分化しているが、日本語母語話者よりカテゴリーの数が少なかった。</p> <p>2) カテゴリーの範囲: 産出においても、理解においても、学習者にとって、L1の中からL2との対応語を見つけにくい場合、過少般化が起きやすく、一方、L2との対応語があると考えた場合、過剰般化が起きやすいと窺えた。また、学習者はL2の適切な語を知らない場合、L2のより典型的な語を持ち込む可能性があると思われた。</p> <p>3) カテゴリー間の重なり: 着用動詞は日常性が高く、具体性も高いため、一般にはこのような動詞のカテゴリー化の習得は比較的容易であると思われる。しかし、産出においても、理解においても、学習者が使用している着用動詞のカテゴリー間のかさなりは母語話者より大きい。学習者は着用動詞のカテゴリーの境界線がはっきりしていない。習熟度の高いほうが、重なりが少し少ないが、依然として母語話者との間には隔りがある。</p> <p>4) カテゴリー化基準: 日本語母語話者は産出においても、理解においても、衣類の種類が最も重要な基準としており、主要な衣類においては、体の部位によって使い分けられている。主要でない衣類においては、着用する動きの特徴によって使い分けられている。これに対し学習者は、理解においては、着用する動きの特徴を最も重要な基準としている。特に下位群の学習者は、「主要な衣類」が何であるのかというカテゴリー化の基準を習得できていない。産出においては、母語の「戴(dai)」「穿(chuan)」「系(ji)」の影響を受け、学習者独自の基準で使い分けられている様子が見受けられた。</p>	

着用動詞は日常性が非常に高い動詞であり、「かける」「つける」は初級段階から学習される基本動詞であるにもかかわらず、上級学習者であっても、動詞の使用範囲があまりはっきりしていない。また、我々は外国語を理解するとき、意識的あるいは無意識的に、母語の知識を用い、目標言語と一対一で対応させようとする傾向がある。そこで、語彙指導において、単独の語彙を説明するのではなく、一連の意味が似た語彙を複数取り上げる必要がある。さらに、ビデオなどの動画を用いることで、学習者に中国語と日本語の語彙カテゴリー化の違いに関する気づきを促すような教室活動を行う必要があると考えられる。

3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))

・“Learning semantic boundaries of L2 verbs: the case of cutting and breaking verbs”, Cognitive linguistics投稿中

・中国人日本語学習者動詞范畴化理解研究(中国語を母語とする日本語学習者による動詞のカテゴリー化の理解の仕方について), 2020年10月に《外语教学与研究》(Foreign Language Teaching and Research)に投稿する予定

・中国人日本語学習者穿着类動詞范畴化習得研究(中国語を母語とする日本語学習者の「着る」事象における語彙カテゴリー化の習得), 2020年12月に《現代外语》(Modern Foreign Languages)に投稿する予定

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・「私たちは世界をどのように切り分けているか一言と認識」, 講演・尚絅学院大学現代社会学特別講義, 2019年12月20日・尚絅学院大学

講演内容: 言語間の違いは語彙カテゴリー化の習得にどう影響しているか。

・「語彙カテゴリーの再構築—L2 学習者はどのように語の概念を習得するか」, 講演・第105回第2言語習得研究会(関東), 2020年6月13日・お茶の水女子大学(コロナの影響でオンラインで行った)

講演内容: 概念転移理論から第二言語学習者の動詞カテゴリー化習得を考察するアプローチを提言した。

○その他の活動

・2019年10月8日、森山新教授の大学院の後期の授業で研究発表を行った。

・2019年12月10日、第14回国際日本学コンソーシアム—グローバル化と日本学(お茶の水女子大学)に参加した。

・2019年12月21日-22日、第30回第二言語習得研究会(JASLA) 全国大会(武蔵野大学)に参加した。

・2020年6月21日-22日、I-JAS 完成記念シンポジウムに参加した(オンライン)。

・2019年11月-2020年1月、東京工業大学、東京大学を複数回訪問して、日本人学生に研究プロジェクトの内容を説明し、実験題材、実験方法などについてアドバイスをもらって、データ収集を行った。

・鎌倉女子大学の佐治伸郎准教授と研究について複数回討論を行った。

・毎週火曜日に森山新教授の大学院前期と大学院後期の授業およびゼミに参加していた。

4. 今後の活動予定

・現在執筆している論文を完成させ、投稿する。また、滞在期間中に収集した「モノを携帯する」動詞に関するデータを分析し、学会発表に参加し、論文を投稿する予定。さらに、これらの研究から得られた知見に基づき、認知科学の観点から第二言語習得を展開し、競争的科学的研究プロジェクトを申請する予定。

・森山新教授の授業で習った理論的枠組み、研究手法、論文指導の要領などを自分自身の大学院での授業及びゼミ運営などに生かし、研究視野を拡大したい。